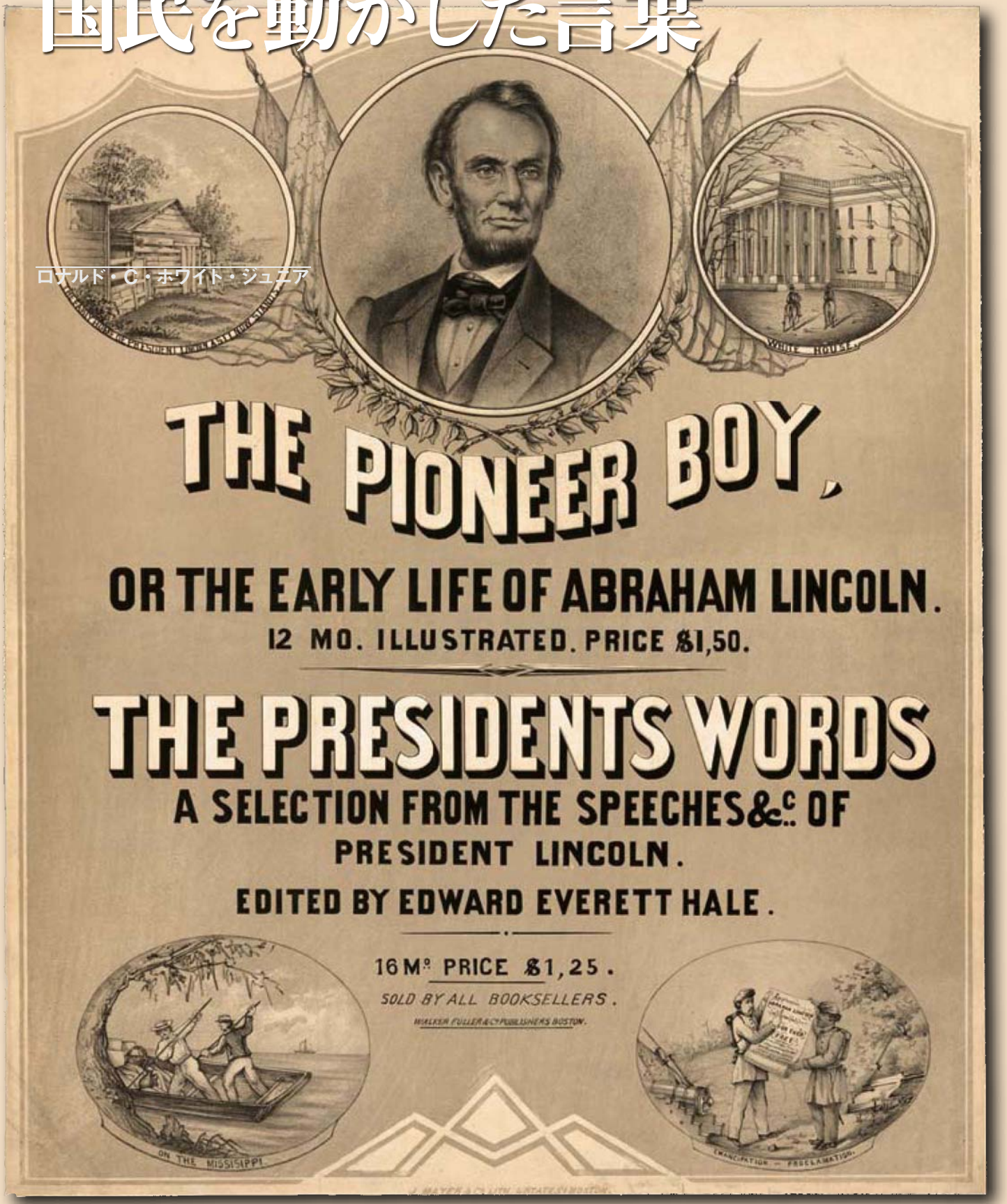
国民を動かした言葉

ロナルド・C・ホワイト・ジュニア



リンカーン演説集の広告。同大統領が卑しい生まれから身を起こしたことが、
いかに多くの米国人の間に深い共感を呼んでいたかを示す。

世界中の人々がワシントンＤＣにあるリンカーン記念堂を見学するために訪れる。この厳かな場所を訪れた人々は、エイブラハム・リンカーンのゲティスバーグ演説と第２期大統領就任演説を読み、畏敬の念を覚える。

「わたしは人を説得する準備をする際、その時間の３分の１をわたし自身のこと、およびわたしが言おうとしていることについて考えるために使う。残りの３分の２は、その人のこと、およびその人が何を言おうとしているかについて考える」

言葉の持つ響きに魅せられたリンカーンは、耳で聴くための文章を書いた。彼は鉛筆で紙に書く前に、その言葉をつぶやいてみたり、大声で口にしてみたりした。その次のリンカーンのやり方は、ゆっくりと話し、ゆっくりと演説原稿を読むことだった。

リンカーンが1861～65年に大統領として行った３つの演説を検証してみよう。わたしとしては、皆さんがリンカーンの言葉を声に出して読んでみることをお勧めする。国民を動かした言葉の意味に、より深く入り込むための練習である。

第１期就任演説（1861年）

1861年３月４日の夜明けは風が強く、冷たかった。２万5000人を超える群衆が、エイブラハム・リンカーンの就任演説が聞こえる場所を求めて、早くから連邦議会議事堂に詰めかけた。これほど波乱に満ちた時代に就任した大統領はこれまでにいなかった。リンカーンが当選したことによって、南部の連邦離脱の可能性はまさに現実のものになろうとしていた。リンカーンの命が狙われているというううわさが首都を駆け巡っていた。

リンカーンはこの就任演説で、和解と力の行使のバランスを取ろうとした。30分近くにわたって話した後、大統領は結びの段落に差し掛かった。初期の草案では、演説は「平和を求めるのか、それとも戦争か」という問い掛けで終わることになっていた。国務長官のウィリアム・スワードはリンカーンに対し、この言葉の代わりに「何か親愛の情を

リンカーンの第1期就任式（1861年3月）

エイブラハム・リンカーンが大統領に就任した当時の連邦議会議事堂

示す言葉――温和で明るい言葉」で演説を締めくくるよう勧めた。２人のやりとりを比較検討してみると、どのようにしてスワードの言葉をリンカーンが自分自身の優れた散文詩に変えたかが分かる。

・**スワード**：これで演説を終わる。
リンカーン：これで演説を終わりにしたくはない。

・**スワード**：われわれは異邦人でも敵でもないし、またそうであってはならない。われわれは同胞であり、兄弟である。
リンカーン：われわれは敵ではなく、友人である。われわれは敵であってはならない。

・**スワード**：激情に駆られて、われわれの親愛のきずなは緊張を強いられているが、そのきずなが断ち切られるようなことがあってはならないし、またそうはならないと確信している。
リンカーン：激情に駆られても、われわれの親愛のきずな (bonds) を断ち切る (break) ことがあってはならない。

・**スワード**：多くの戦場と多くの愛国者の墓から発し、われわれのこの広い大陸のすべての人々の心と炉辺を通っている神秘的な弦は、この国の守護天使に息を吹き込まれ、再びその古い音楽の中でひとつになって調和するだろう。
リンカーン：記憶という神秘的な弦が、すべての戦場 (battlefield) と愛国者の墓から、今生きているすべて人の心と炉辺へと、この広大な (broad) 国土全体に張り渡されており、われわれの本来のより良き (better) 守護天使によって、必ずやその弦が再びつま弾かれるときが訪れ、そのときには「統一」（連邦）の声がさらに高らかに響くであろう。

リンカーンは本筋とは無関係な言葉を削り取った。同じような音を持つ言葉や音節を集めた。頭韻を使い、最後の２つの文章では同じ子音と音を５回も重ねて、聞く人にそれらの言葉を関連付けるようにさせている。

ブレイク (break)
ボンズ (bonds)
バトルフィールド (battlefield)
ブロード (broad)
ベター (better)

リンカーンは力強いイメージを使って、国民に祖国の過去を思い起こさせ、また未来についての彼の政治的ビジョンを示したのである。

ゲティスバーグ演説（1863年）

1863年7月1～3日、連邦軍と南部連合軍はペンシルベニア州の小さな村ゲティスバーグで大戦闘を繰り広げた。3日間で死者、負傷者、行方不明者は5万人近くに上り、多くの兵士が桃の果樹園や農場の牧草地に横たわっていた。

11月19日、1万5000人近くの人々がゲティスバーグに集まり、米国初の国立戦没者墓地の開所式を行った。式にはハーバード大学元学長のエドワード・エバレットが招かれ、特別講演を行った。大統領のリンカーンは、この機会に「ふさわしい言葉を一言」述べるように求められた。エバレットの2時間7分に及ぶ講演が終わった後、リンカーンが行ったスピーチは長さ2分半、わずか272語だった。

> 80と7年前(Four score and seven years ago)、われわれの父祖たちは、自由の精神にはぐくまれ、人は皆平等に創られているという信条にささげられた新しい国家を、この大陸に誕生させた。

「80と7年」という表現は、単に87年(eighty-seven years)と言うのとは異なる。リンカーンは聴衆に対し、過去にさかのぼって計算することを求め、合衆国が発足したのは連邦政府を樹立した1787年の憲法によってではなく、その創設者たちが承認した普遍の真理の宣言、すなわち1776年の独立宣言の署名によってであることに気付かせようとしたのである。リンカーンはまた、この「80と7年」の1節を、聖書の知識がある米国人なら、詩篇90と結び付けて考えるであろうと確信して、使うべき言葉を選択している。詩篇90では、死を迎えようとしている男が自らの人生を振り返り、次のように述べて、自分がこの世で過ごした短い時間が意味のあるものであったことを願っている。

ペンシルベニア州ゲティスバーグに到着するリンカーン大統領。同大統領のゲティスバーグ演説は、3日間の戦闘で約8000人の米国人が命を落とした場所を神に墓地として献納するためのものであった。

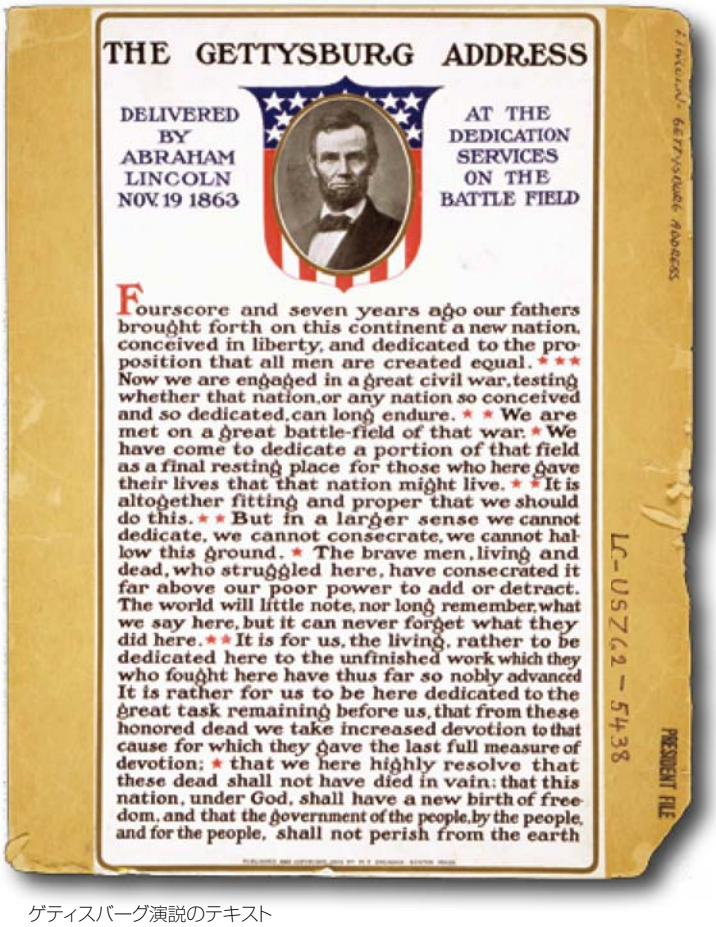
> わたしたちの齢は60と10年(threescore years and ten)
> 健やかであっても80年(fourscore years)

リンカーンはゲティスバーグ演説を過去、現在、未来という時間の枠組みに基づいて組み立てた。まず、過去から始め、戦場を墓地として献納することを、米国史というより大きな物語の中に位置付けた。「われわれの父祖たち」について語ることで、南部・北部双方にとって共通の遺産である、「建国の父たち」を思い起こさせたのである。

演説の冒頭のセンテンスの末尾でも、独立宣言の別の部分、すなわち「すべての人は生まれながらにして平等である」という真実に言及している。この真実を確認することによって、リンカーンは南北戦争を自由――奴隷のための――を確保し、統一国家を維持するための戦いと定義付けたのである。

> 今われわれは、一大内戦のさなかにあり、戦うことにより、自由の精神をはぐくみ、自由の心情にささげられたこの国家が、あるいは、このようなあらゆる国家が、長く存続することは可能なのかどうかを試しているわけである。われわれはそのような戦争の一大激戦の地で、相会している。われわれはこの国家が生き永らえるようにと、ここで生命をささげた人々の最後の安息の場所として、この戦場の一部をささげるためにやってきた。

長い前置きのセンテンスの後、リンカーンは聴衆の関心を独立戦争から南北戦争へと速やかに導いていった。この戦争の意味を要約したのである。エドワード・エバレットとは異なり、リンカーンは先ごろの戦いの細部にはまったく触れなかった。むしろ、その枠を越えて、式典を「国家」というより大きな目的と結び付けた。彼はこの



THE GETTYSBURG ADDRESS

DELIVERED BY ABRAHAM LINCOLN NOV. 19 1863

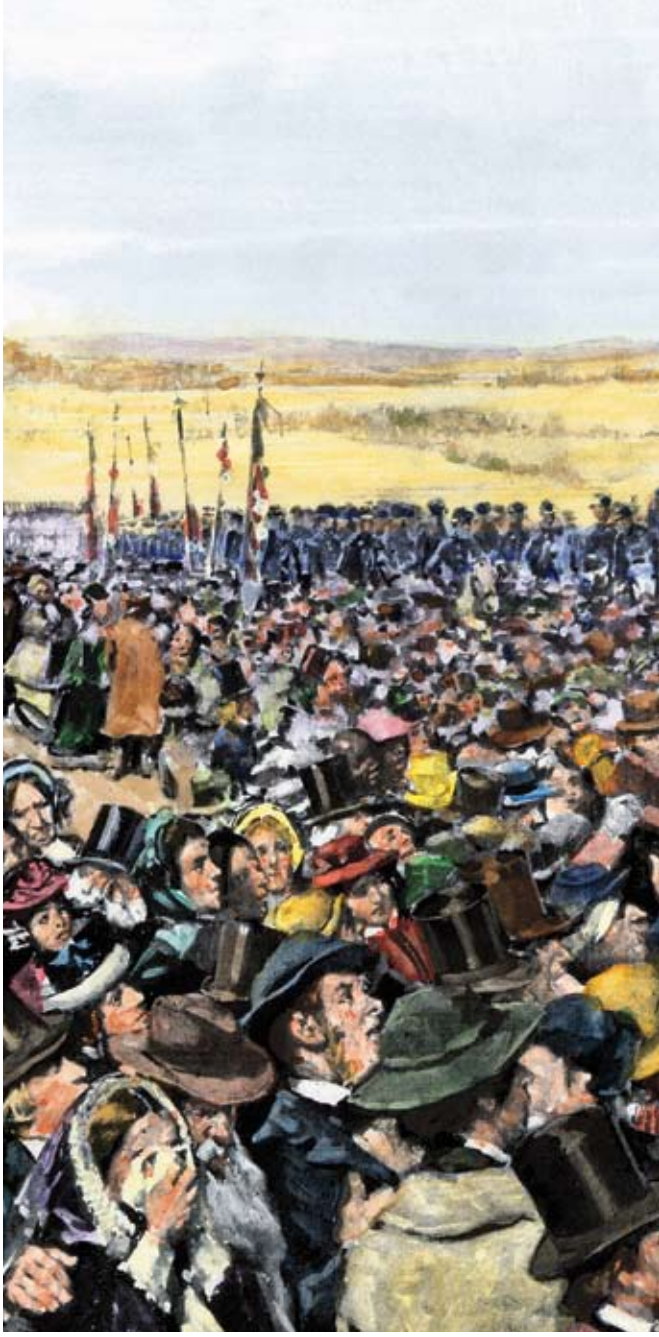
AT THE DEDICATION SERVICES ON THE BATTLE FIELD

Fourscore and seven years ago our fathers brought forth on this continent a new nation, conceived in liberty, and dedicated to the proposition that all men are created equal. * * * Now we are engaged in a great civil war, testing whether that nation, or any nation so conceived and so dedicated, can long endure. * * We are met on a great battle-field of that war. * We have come to dedicate a portion of that field as a final resting place for those who here gave their lives that that nation might live. * * It is altogether fitting and proper that we should do this. * * But in a larger sense we cannot dedicate, we cannot consecrate, we cannot hallow this ground. * The brave men, living and dead, who struggled here, have consecrated it far above our poor power to add or detract. The world will little note, nor long remember, what we say here, but it can never forget what they did here. * * It is for us, the living, rather to be dedicated here to the unfinished work which they who fought here have thus far so nobly advanced It is rather for us to be here dedicated to the great task remaining before us, that from these honored dead we take increased devotion to that cause for which they gave the last full measure of devotion; * that we here highly resolve that these dead shall not have died in vain; that this nation, under God, shall have a new birth of freedom, and that the government of the people, by the people, and for the people, shall not perish from the earth

LC-USZ62-5438

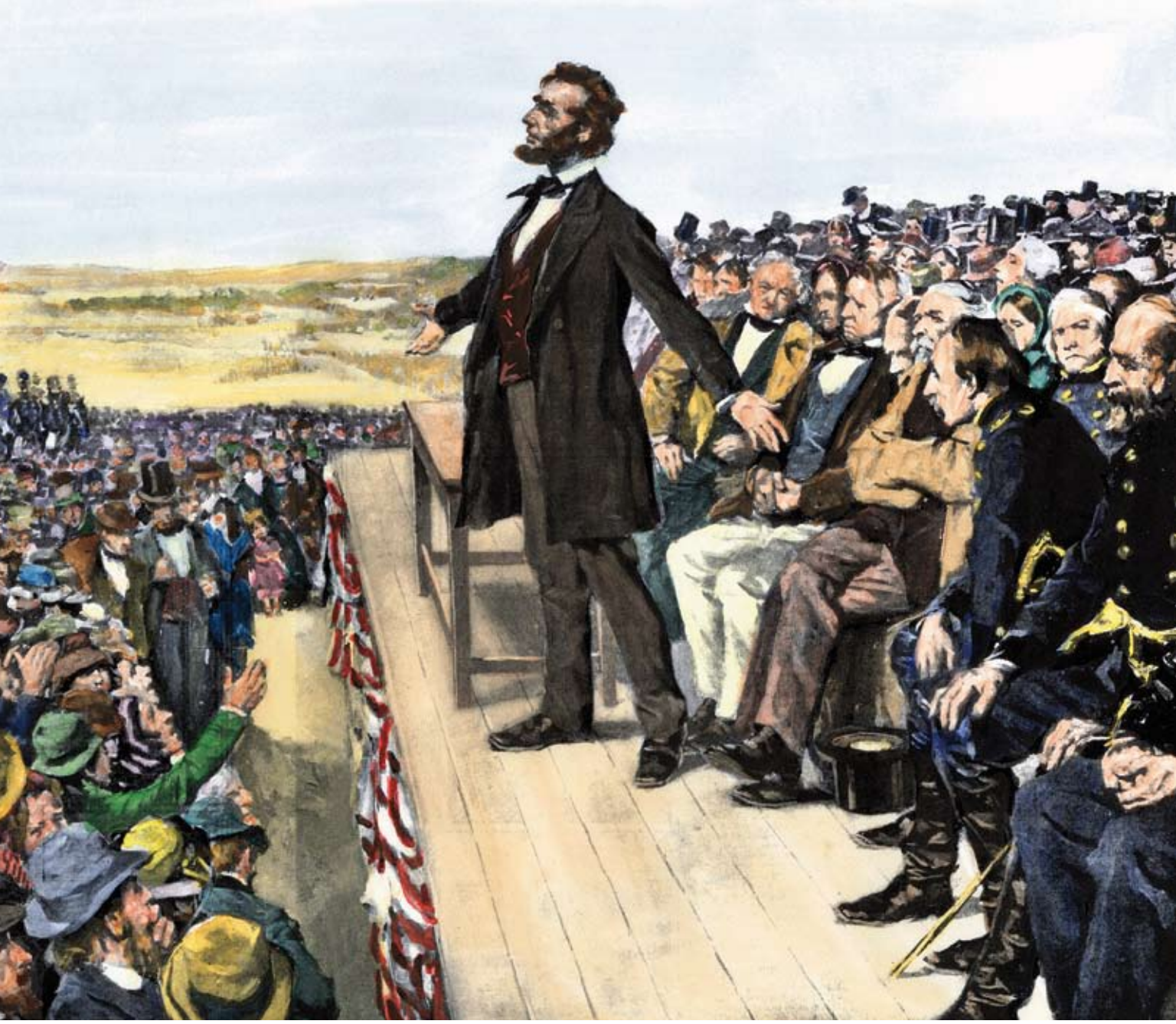
PRESIDENT FILE

ゲティスバーグ演説のテキスト



ゲティスバーグ演説を行うリンカーン大統領

ゲティスバーグの戦闘初日の
連邦軍死者



演説で「国家」という言葉を５回使った。南北戦争は米国建国の理想を「試すもの」であり、その理想が「生き永らえる」ことができるかどうかを決めるものであった。

> われわれがそうすることは、まことに適切であり好ましいことである。しかし、さらに大きな意味で、われわれはこの土地をささげることはできない。清めささげることもできない。聖別することもできない。足すことも引くこともできない、われわれの貧弱な力をはるかに超越し、生き残った者、戦死した者とを問わず、ここで闘った勇敢な人々がすでに、この土地を清めささげているからである。

これらの言葉は、リンカーンの視点が戦場での出来事から将来の出来事へ向かっていることを示すものであった。しかし、目を上げて戦場の向こうを見る前に、リンカーンは聴衆に対し、「われわれができないこと」を告げた。

> われわれはこの土地をささげることはできない
> 清めささげることもできない
> 聖別することもできない

演説の終りの３つのセンテンスで、リンカーンは最後にもう一度焦点を移した。

> 世界は、われわれがここで述べることに、さして注意を払わず、長く記憶にとどめることもないだろう。しかし、彼らがここで成したことを決して忘れ去ることはできない。ここで戦った人々が気高くもここまで勇敢に推し進めてきた未完の事業にここでささげるべきは、むしろ生きているわれわれなのである。われわれの目の前に残された偉大な事業にここで身をささげるべきは、むしろわ

れわれ自身なのである。――それは、名誉ある戦死者たちが、最後の全力を尽くして身命をささげた偉大な大義に対して、彼らの後を受け継いで、われわれが一層の献身を決意することであり、これらの戦死者の死を決して無駄にしないために、この国に神の下で自由の新しい誕生を迎えさせるために、そして、人民の人民による人民のための政治を地上から決して絶滅させないために、われわれがここで固く決意することである。

リンカーンはここで、自分が抱いている未来および聴衆の責任についてのビジョン、ひいては、そのビジョンを実現するために米国人ひとりひとりが果たすべき責任を明確に述べている。彼は言葉から行動へと注意を促した。「われわれがここで言っていること」と「彼らがここでしたこと」を対比したのである。

この時点で、リンカーンは演説原稿になかった言葉をひとつだけ付け加えた。その言葉は「神の下で」だった。それは、準備なしのスピーチを信用しないリンカーンのような演説者にはふさわしくない、自然発生的な文言の修正であった。リンカーンは以前にもいくつかの演説で即興の言葉を追加したことがあったが、後で文言を変えたことをわびるのが普通だった。しかし、このときには、わびの言葉はなかった。そしてリンカーンは「神の下で」という文言を、後になって作成した演説の写し3通のすべてに盛り込んだ。

「神の下で」はその前後の言葉にかかっている。すなわち、政治的・宗教的な信条を根源として存在する「この国」という前の言葉とともに、「新たな誕生」という後ろの言葉にもかかっている。リンカーンは、南北戦争を清めの儀式と受け止めていたのである。古い「連邦」は死ななければならない。老人は死ななければならない。死は、新たな連邦、新たな人間への転換となる。

予想外に短い演説のクライマックスに近づくと、リンカーンは最もよく記憶されることになる言葉を述べた。

そして、人民の
人民による
人民のための政治を
地上から決して絶滅させない
ために

演説は終わった。リンカーンは、「わたしは」という言葉を一度も使わなかった。リンカーンはまるで、米国人が妨げられることなく彼の示す卓越した真実に集中できるように姿を消したようだった。

第2期就任演説（1865年）

1865年3月4日の就任式が近づく中で、エイブラハム・リンカーン大統領が希望を抱くのはもっともなことであった。4年に及ぶ戦争の後、南部連合はまだ壊滅こそしていないものの、分断状態になっていた。しかし、この

ゲティスバーグ演説に先立って行われたパレード。演説そのものの評判は、当時、それほど高くなかった。南北戦争を「自由の新たな誕生」と定義付けた演説の重要性をすべての人々が理解するようになったのは、後になってからのことである。

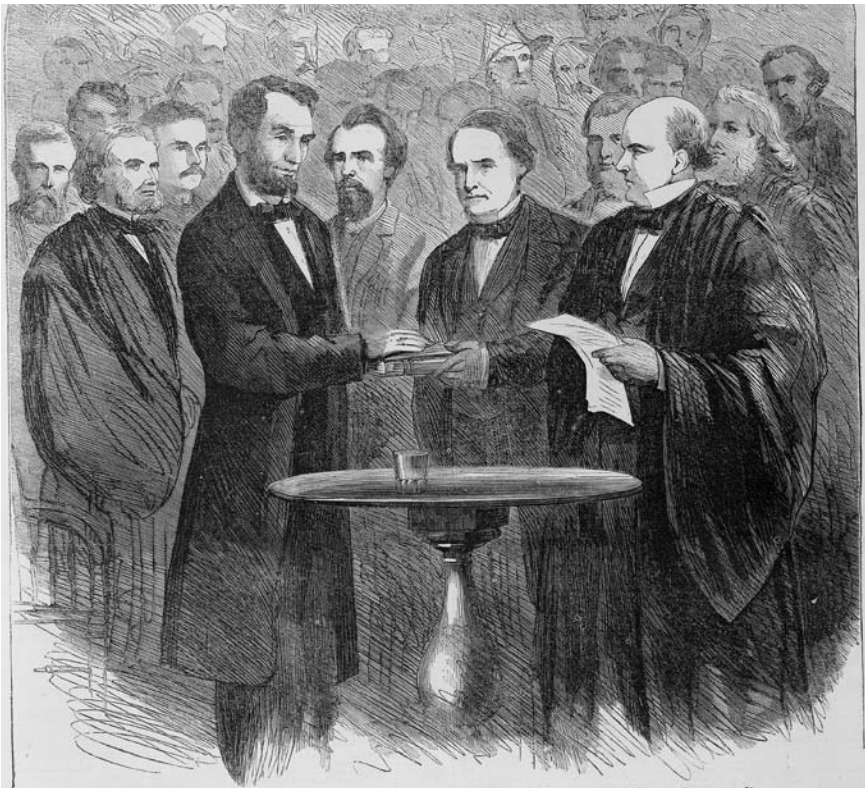
希望に満ちた気分には不安が付きまとっていた。首都ワシントンでは、敗北が差し迫っていることを自覚して自暴自棄に陥った南部連合支持者が、大統領の拉致あるいは暗殺を図るというわさが飛び交った。

リンカーンの第２期就任演説の長さは、語数にして701、そのうちの505語は１音節語であった。リンカーンはこの演説を抑えた調子で開始した。至る所に兵士の姿が見られるなど、非常に緊張した雰囲気の中にある戦時下のワシントンで、期待感が高まるのを抑えようとしたようだった。

演説の２段落目のすべてのセンテンスで、リンカーンは戦争のイメージを使っている。この段落全体に緊張がみなぎっており、「そして戦争になった」(And the war came.) という最後の一文で最高潮に達する。４つの単語、４つの音節で、リンカーンは、政治指導者たちの最善の意図にもかかわらず、「戦争になった」と認めた。聴衆に対し、この戦争は単に人間が計画して遂行したものだとするだけでは理解できないということを理解するよう望んでいるのである。

「両者とも同じ聖書を読み、同じ神に祈っている」ここで聖書を持ち出すことによって、演説は新たな領域に入る。それまでの18回の大統領就任演説で、聖書からの引用が行われたのは１回だけだった。こうして、リンカーンは神意と政治の両方の視点から南北戦争を検証する意図を示したのである。

両陣営の兵士たちが、同じ聖書を読み、同じような祈りをささげていることに気付いたリンカーンは、聖書を適切に使う方法を探った。リンカーンは、人々が聖書と祈りの言葉を振りかざして、神の好意を自分たちの側に引き付けようとしているが、これは同じ本を反対に読むことと変わらないと示唆している。聖書を読み、聖書は奴隷制を是認していると信じている人々がいる一方で、もう一方には、聖書は奴隷制の廃止を促していると理解している人々がいる。(「両者とも、同じ聖書を読み、同じ神に祈り、そしてそれぞれが敵に勝つために神の助力を求めている」) リンカーンは、そうではなくて、包含する神、すなわち、特定の一部の人々あるいは党派に味方することのない神の存在を主張する。



大統領就任宣誓をするリンカーン（1861年3月）

演説は最後の段落に向けて予想外の展開を見せる。聴衆の多くが、リンカーンは連邦側の成功をたたえる言葉を述べると予想していたのに反し、彼は勇気を持って、あまりにも多くの米国人がそれまで黙認し、米国という国民全体の家族の中心に長く住み着いてきた悪弊を指摘した。もし、神が今奴隷制の終焉を意図されたのであれば、「この悲惨な戦争」は「このつまずき（罪）を犯した人々が引き起こした不幸」として現れたものだった。

リンカーンは、悪があれば、それに対する審判があると信じるに至っていたのである。そして連邦側・連合側合わせて62万3000人の兵士が戦死したことがその審判であったと判断し、その審判を受け入れた。

> 戦争という天罰が速やかに過ぎ去ることを、われわれは心を込めて願い、熱心に祈っている。しかし、鞭によって流された血の一滴一滴が、剣によって流された血の一滴一滴で償われるまで、（中略）戦争は続くというのが神のご意思であるとすれば、3000年前にも言われたように、「主のさばきはまことにして、ことごとく正しい」と今も言わなければならない。

リンカーンは国民に自分たちの歴史を正義という尺度に基づいて熟考するよう促した。自らの不正な行為を認めることを快く受け入れる国民はいないと知りながら、リンカーンはあえてそれを求めたのである。

> 何人にも悪意を抱かず、すべての人に慈愛を持って…

「何人にも悪意を抱かず、すべての人に慈愛を持って…」1865 年のリンカーン第2期就任演説

演説の終わりに、リンカーンは国民に対し、敵意ではなく寛容の心を持って、新たな時代に入るよう呼び掛けた。この言葉は直ちに、第２期就任演説で最も記憶に残る言い回しとなった。大統領は、同胞が相争った、米国史上最も破壊的な武力紛争が終結に近づいていることを十分承知しており、深い哀れみの気持ちに基づいた行動を米国人に求めようとしていた。地域・派閥主義の壁を克服し、和解して団結するよう呼び掛けようとしていたのである。

リンカーンは第２期就任演説を癒やしの言葉で締めくくる。

（国民が負った傷に）包帯をし

（戦争を耐え忍んだ兵士や未亡人）の世話をし

われわれ自身の間に、またすべての国家との間に、公正かつ恒久的な平和をもたらし、これをはぐくむすべてのことを実行するために

リンカーンは、この平和を勝ち取ることは、和解を達成することであると定義していた。彼は演説の最終段落で、米国人が敗者をどのように扱うかによって戦争の目的が真に試されるだろうと強調しているのである。

現代では「口では何とでも言える」という決まり文句があり、そう言えば議論に勝つことも時にはあるようだ。しかし、本稿で述べたリンカーンの人物像は、言葉は重要であるという前提に基づいている。リンカーンは、国民を奮い立たせる言葉で、南北戦争を通じて米国を導いたのである。

筆者の**ロナルド・C・ホワイト**は、ハンティントン図書館の特別研究員、カリフォルニア大学ロサンゼルス校の客員教授（歴史学）、サンフランシスコ神学校の名誉教授（米国神学史）。著書に『The Eloquent President: A Portrait of Lincoln Through His Words』（雄弁なる大統領～言葉から見たリンカーンの人物像）がある。